櫻部　建・小谷信千代訳

『倶舎論の原典解明　賢聖品』

秋本　勝

一

今般、櫻部建、小谷信千代両氏によって『倶舎論』第六章「賢聖品」の和訳『倶舎論の原典解明　賢聖品』が上梓された。両氏は大谷大学における倶舎学の伝統のなかにあって、これまでアビダルマ関係の研究で学会に寄与されてきたこと多大なることはここに記すまでもない。櫻部は倶舎をはじめとするアビダルマを専門とし、その分野の業績は枚挙に暇がない。氏はまた〈ダルマ〉としての阿含・ニカーヤも渉猟されている。小谷は唯識の分野の諸業績に加え、数年前に『チベット倶舎学の研究』[1]を出された。また、最近では学位論文をまとめなおされた『法と行の思想としての仏教』[2]を刊行された。この櫻部、小谷によって倶舎六章和訳が刊行されたことは上記の伝統の中で必然的であるとは言え、まことに有難いことである。

本書は「緒言」に書かれているように、当該大学内外の研究者が勉強会のメンバーとして貢献され、検討・修正の上、櫻部が世親釈（カーリカーを含む）、小谷が称友疏の和訳を担当されたものである。このような労作を筆者が評するなどということはとても及びがたいので、以下に本書にまつわる事柄のいくつかに触れて本書の紹介に代えたいと考える。

二

櫻部は最新稿「大谷大学の倶舎学の伝統について」[3]に、倶舎は学科課程の中で、仏教の教理を学び始めようとする人々のための入門の学、基礎の学であったと述べられている。確かに倶舎は全編にわたって仏教術語辞典となっている感があり、そこに繰り広げられる議論とともに〈法〉の宝庫であることから、まず倶舎から始めることは自然であるとも言える。しかしまた同時に倶舎を修めるということはある意味で仏教を修めるということでもあるから単なる入門ないし基礎学ではすまないとも言える。このような倶舎を現代において基礎学として位置付けるためには一つに現代語訳の完備が要請される。術語については現段階では玄奘訳を用いることが最善であると思われるが、ともかくサンスクリットテキストを日本語で読めるようになることが急がれる。

これまで、第一章（界品）、第二章（根品）については荻原雲来、山口益によって称友疏が和訳されており[4]、世親釈は櫻部によって『倶舎論の研究』[5]および『世界の名著』（第二巻「大乗仏教」[6]）に和訳が提示されている。第三章（世間品）は山口益、舟橋一哉によって釈（底本はチベット語訳）、疏とも和訳され[7]、第四章（業品）については舟橋一哉によって釈、疏ともサンスクリットテキストからの和訳[8]が成し遂げられた。そして、

本書がそれに続くわけである。[9] したがって、書名も第三章からのものが踏襲されて『倶舎論の原典解明』とされ、構成もほぼ合わせられている。

三

「凡例」によると、章節の分け方は前二書が国訳大蔵経[10]に依ると記されているが、本書は「目次対照表」において冠導本[11]と対比されている。主な違いは「三賢」、「四善根」が冠導本では「第三章　見道の加行論」中に含まれるのに対して、本書（目次）ではそれぞれ「4」（第四章）、「5」（第五章）として独立している。他はほぼ冠導本に一致している。また、世親釈の語句が称友疏に引かれている場合は、いずれの訳文中にもその語句に傍線が施されている点は三書に共通である。また、サンスクリットの語句などを補う（　）や訳者が語句を補う〔　〕の使い方もほぼ共通である。本書の訳注には、法宣の『阿毘達磨倶舎論講義』が多用されているが、「凡例」五にその理由―論旨を理解しやすくすること、および東アジアの倶舎学の水準を示す一助とすること―が述べられている。

四

本書の「緒言」にも触れられているが、このような和訳の仕事に必ず起こる訳語の問題がある。仏教文献の翻訳にも必ず付きまとう問題であり、答えは一様でないのかもしれない。これまでの日本の仏教研究の伝統から言えば、そこに浸透した漢訳語を用いることが今日でも妥当であると思われるし、最も便利である。しかし、それはまた仏教学専門家だけに仏教を独占させてしまうことになりかねない。それは適切な現代語に置き換えることが最も望ましいと考えられる所以でもあるが、倶舎論のような仏教教理の高度の専門書で術語が頻繁に用いられて詳細な議論が展開される書にあっては容易いことではない。先に挙げた『世界の名著』第二巻における櫻部の訳は、その点で優れた現代語訳の試みであると考えられるが、その後この手法があまり広がりを見せないのは残念である。

櫻部は『倶舎論の研究』（一二六頁）で以下のように、述べておられる。

> これらの術語をすべて現代日本語の形に改めて訳出することは、可能であるけれども、それはおそらく訳文を幾分煩雑にあるいは冗長にするだけで、それによって読者の理解を著しく容易にするとは思われない。われわれに得られている説一切有部の論書の大部分が玄奘による漢訳のそれであることからして、アビダルマの術語に限って、玄奘の訳語を踏襲することが却って理解に便であることは、少しくこれらの論書に親しんだ者の等しく知る所である。

と。たしかに、現時点では、ほとんど漢訳で残されまた仏教術語が頻出するアビダルマ文献では玄奘の訳語を用いることが最善であると言わざるを得ない。それでもなお、前途遼遠であるのかもしれないが、いつか現代日本語で『倶舎論』が読めるようになることを筆者は期待したい。

五

『倶舎論』第六章の標題についても「緒言」に詳しく論じられている。[12] プラダン本では標題は Mārgapudgalanirdeśa- であり、mārga- を「聖道たる見、修、無学の三道」、pudgala- を「四向四果の八聖者」の意にとって、標題を「[聖]道と[聖]者との解説」とされている。それは至極妥当なものと思われる。ただ、Mārganirdeśa. でも十分であるとも思えるところ、なぜこの章だけに pudgala- が付せられるのかが不明である。[13] 特別な意味はないのかもしれないが、Dhātunirdeśa- から始まって Samāpattinirdeśa- に至るまで第六章だけが例外的であるとも言える。内容的に見ると「見道」以下においていわゆる「四向四果」（聖者）の解説が行われるから、もちろん不思議なことではない。本書四頁註（3）に引用される法宣[14]（巻七、八七頁）の解説には、『倶舎論』の第三章から第五章は有漏法を、第六章から第八章は無漏法を明かすとある。もしそれぞれの章が「果」「因」「縁」を示して有漏・無漏で対応するとするなら、Lokanirdeśa-（第三章）と当該の Mārgapudgalanirdeśa-（第六章）とが果として対応することとなり、「聖道と聖者」は Loka（世間）すなわち「器世間と有情世間」とで対応すると考えられるかもしれない。[15]

また、玄奘訳での標題が「賢聖品」となっていることについても妥当な見解を記されていると考える。すなわち、サンスクリット原典との直接的な対応はないであろうとされた上で

（「緒言」iii-iv頁）、

説一切有部阿毘達磨の説く修行道では聖道に入る前の行者に念住や四善根を修する過程が考えられているのであり、その過程に在る行者を「賢者」と呼ぶことも不適当だとは思われない。したがって、この第六章を「賢聖品」の名をもって呼ぶことは、上記のごとく、その内容からいってはむしろ適切であろう。

と述べられているとおりである。

六

本書が訳出している第六章の内容についてもいささか触れないわけにはいかない。まず本章の位置付けである。先に触れた法宣も同様であるが、普光は、『倶舎論』第一章（界品）・第二章（根品）は総じて有漏・無漏を明かし、第三章（世間品）から第五章（随眠品）までは有漏を明かしながらそれぞれ「果」、「因」、「縁」の関係にあるとする。また、第六章から第八章までは無漏を明かしながら同様に本書が訳出する第六章を「果」とし、後の第七章、第八章をそれぞれ「因」、「縁」の関係にあるとする。[16] 小谷（『チベット倶舎学』一一-一二頁）は第三章以下についてのチムゼーのより具体的な説明を以下のように紹介する。

すなわち、雑染の存在である三界や五趣の有情世間とは何か、雑染がそこにおいて生ずる器世間とは何か、雑染は四生や十二縁起としていかにして生ずるか、ということを

説明する「世間を説く章」（世間品）と、雑染せしめるものを主題とする「業を説く章」（業）と「随眠を説く章」（随眠品）とである。…すなわち、浄化する者である人（プドガラ）とは誰か、浄化の行われる場所である三界とは何か、どういう順序で浄化のための現観は行われるかを説く「道と人を説く章」（賢聖品）と、浄化せしめる「智を説く章」（智品）と、智の所依を説明することを主題とする「定を説く章」（定品）とである。

と。

次に、内容[17]であるが、まず本書は「目次」を十章立てとする。すなわち、1道についての総説／2諦／3道への最初の出発／4順解脱分（三賢）／5順決択分（四善根）／6見道／7修道／8無学道／9阿羅漢とその種性など／10種々の道、である。

1（本書一-五頁）は序論とも言うべきもので、見道が無漏、修道が有漏・無漏二種であることを述べて直前の章（随眠品）とをつなぐ。

2（五-六五頁）は四諦の解説である。『倶舎論』第一章で説かれたことを引用しながら、「それら四諦の順序は、現観の順序のごとくである。(2d)[18]」（六頁）と言い、さらに「それら四諦の中で、果としてある五取蘊が苦諦である。因として五取蘊が集諦である。……それら苦と集とは、それらが果であり因であることによってただ名として別なのであり、実体として別なのではない。」（一二頁）と説いて、特に苦と集とについて詳細な解説（一五頁以下）が行われる。[19]世俗諦と勝義諦の二諦も「傍論」として触れられている（六一-六五頁）。

3（六五-七六頁）・4（七六-一一三頁）・5（一一三-一五七頁）は見道等（聖道）へ入る準備としての実践方法を説く。これは後の無漏の修道に対して、有漏の修道である。まず「戒という実践に居る者が、聞と思とを備え、修習を行ずる。(5ab)」（六五頁）と言う。諦を見ようと志す者はまず戒を守り、正しい習慣づけから始めて、いわゆる聞・思・修（三昧）の知恵を得る。「二つの遠離をなす彼に修習は完成することになる。(6a)」（七〇頁）と言って、衆人と離れ、悪心から離れることによって「聖道に向かう器」（七六頁）となることを示す。

その人がもし「貪」が多ければ「不浄観」、「尋」（対象に向かっての心の動揺）が多ければ「入出息念」を行うという（七六-七七頁）。さらに不浄観と入出息念の解説（七八-九八頁）があり、これによって「奢摩他を全うじた者」となる。次に、「毘鉢舎那を成すために」（九八頁）「四念住」をなすべきである。それには、身・受・心・法の四について順に身は不浄、受は苦、心は無常、法は無我であると観察し、それら各々がどれも非常、苦、空、非我であると観ずる「別相念住」と、それら四をまとめて非常、[20]苦、空、非我であると観ずる「総相念住」があるという（九八-一一三頁）。

三賢を終えたものは四善根に進む。「煖」、「頂」、「忍」、「世第一法」を順当に進めば見道（無漏道）に入ることになる。それら四はすべて有漏の知恵によって四諦を繰り返し観察するも

のである。そして、凡夫から聖者に至る点について「それらは、また、すべての世間的な（有漏の）諸法の中の最も勝れたものなるゆえ世間的でありかつ第一の法であるから、世第一法である。世第一法は有漏であって、その次の刹那に生ずべき無漏の道のための同類因となり得ないが、同類因はなくとも無漏道はその世第一法の士用力によって士用果として引かれるからである。」（一二七頁）と言う。

6（一五七-一九九頁）・7（二〇〇-二九七頁）・8（二九八-三四六頁）は聖道（無漏道）である。まず、見道は四諦それぞれに対して法智忍、法智、類智忍、類智が順に起こって、「この四諦の現観は十六心に亙る」（一六四頁）と言う。十六刹那の間に四諦を観察することによって、九八随眠のうちの八八が断ち切られる（直前章「随眠品」に基づく）。例えば、欲界の見苦所断の随眠は苦法智忍・苦法智によって断たれる。但し、十五刹那までが見道であり、色・無色界の見道所断の随眠が断たれる最後の第十六刹那はすでに修道である（一八一頁）。見道にある者は、聖者の位としての四向四果のうちの「預流向」と呼ばれる（一九〇頁）。

見道第十六刹那以降の長い道のりが修道である。ここで残りの十随眠が断たれる。聖者の位は「預流果」（二〇四頁以下）、「一来向」、「一来果」、「不還向」（二一三頁以下）、「不還果」（二三二頁以下）、「阿羅漢向」（二八三頁以下）と進むことになる。

修道を終えたとき、無学道に入る。すなわち「尽智が生じたときかの阿羅漢向は無学となり、阿羅漢性なる果を得た阿羅漢となる。」（二九八頁）と言う。まさに「阿羅漢果」である。「彼は、もはや余の果についてさらに学ぶべきものはないから「無学」であり、まさにそのゆえに彼は利他をなすにふさわしいから、また、あらゆる有貪の者からの供養を受けるにふさわしいから、「阿羅漢」と呼ばれる。」（同頁）と言う。

9（三四七-四一四頁）では阿羅漢にも六種ありとして解説が行われる。

10（四一四-四六五頁）では経に説かれている種々の道について論じられる。

七

以上極めて大雑把な内容の概観を試みた。尚、本書の「緒言」三（iv-viii頁）に「有漏道における断惑」と「転根すなわち練根」とについて明快で興味深い解説が施されているが、ここではそのことを指摘するだけに止める。

これは怠け者の望みかもしれないが、ひとつだけ願望しておきたい。今後の刊行の際にできるなら当該章のカーリカーの番号を上に付して、和訳とともに太字体にしていただければ、より一層見やすく便利になると思われる。

最後に、本書の紹介を十分になしえたとはとても思えないが、本書の刊行はアビダルマ研究、倶舎研究に欠くべからざるものとなるということは言うに及ばず、残る章の和訳の一日も早い刊行を切に期待したいということを述べて、この拙文を終えた

い。

註

① 副題―『チムゼー』賢聖品の解読―が付せられて、文栄堂より一九九五年に出版されている。

② 文栄堂より二〇〇〇年八月に出版。

③ 『仏教学セミナー』第七〇号（一九九九、一〇）所収。

④ 荻原雲来訳註『和訳　称友倶舎論疏（一）』（梵文倶舎論疏刊行会、一九三三年）、荻原雲来・山口益訳註『同（二）』（同、一九三九年）

⑤ 法蔵館より一九六九年に出版。

⑥ 中央公論社より一九六七年に出版。

⑦ 『倶舎論の原典解明　世間品』、法蔵館、一九五五年（一九八七年に再版）。

⑧ 『倶舎論の原典解明　業品』、法蔵館、一九八七年。

⑨ 第五章（随眠品）もすでに原稿はできあがっていると聞く。

⑩ 論部第十二巻。国民文庫刊行会より、一九七五年に出版。

⑪ 『冠導阿毘達磨倶舎論』（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）。法蔵館より一九七八年に出版。Ⅰの「はしがき」に、目次は『国訳一切経』毘曇部二六（大東出版社、一九七六年改訂出版）をほぼ借用したとある。それはまた、『国訳大蔵経』の目次とほぼ同じである。

⑫ 小谷信千代『チベット倶舎学の研究』（一二―一三頁）にも触れられている。

⑬ 第一章から第八章まで、-nirdeśa- を省いて章名を示すと、Dhātu-, Indriya, Loka, Karma, Anuśaya, Mārgapudgala, Jñāna, Samāpatti である。

⑭ 前掲の櫻部建「大谷大学の倶舎学の伝統について」三八頁に触れられている。

⑮ 第六章の内容解説の個所で、普光（『倶舎論記』）、法寶（『倶舎論疏』）、チムゼーともにそれぞれ「聖道に約して人を弁ずること」、「道に就いて人を弁ずること」、「修習する人に関する解説」とあるのは注意してよい（小谷『チベット倶舎学の研究』一三―一四頁）。また、本稿「六」に引用した「チムゼーの説明」参照。

⑯ 『倶舎論（仏典講座二六）』（大蔵出版、一九八一）一九頁以下参照。

⑰ 櫻部建『倶舎論（仏典講座18）』三〇-三二頁、小谷信千代『チベット倶舎学の研究』一二―二〇頁に要約される。

⑱ 〔　〕等は省略してここに引用した。以下同様。

⑲ 『倶舎論』も、有漏を説くという第三―五章が苦・集、無漏を説くという第六―八章が滅・道に当たるものと考えてよいのであろう。

⑳ 本書には、四行相の第一の訳語として「非常」と「無常」とが現れるが、非と無の使い分けが意図されているのであろうか。一一二頁では偈中で「非常」、釈中で「無常」（九八、一一四頁でも釈中で「無常」）と訳されているから、そのような区別であるのか。cf. 玄奘訳（大正大蔵二九巻一一九頁a-b）は、すべて「非常」である。